

第二十願の内景

曾 我 量 深

一

十七願と二十の願という二つの願があります。二十の願は宿善の願で機につき、また十七願は宿縁の願で法につく。二十の願の方は、これは機に属するものでございます。これは我々衆生の方に属するものでございます。機に属するのは宿善。如来に属する方は宿縁。多生曠劫の因縁が宿縁です。聖教でも「噫、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、真実の浄信は億劫にもえがたし。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と述べてあります。

宿善というのはですね、宿業である。私どもが宿業と申すのは有漏で、これはすべて純粹でない。善または悪で、要するに、三界の迷いの果を引くところの因になるのでございます。だからして善も悪も絶対悪ということである。絶対悪のなかには相對善も入っている。宿業はそういうような善悪をも入れる。宿善と宿悪というものが入っている。宿業というと、まあすべて悪だと思われている。『歎異抄』十三条なんか見ますというと、悪であることに決まっているように言うてあります。けれどもとにかく、善であれ悪であれ、有漏に属するものであります。

二十の願のなかに「聞我名号係念我国」とありますけれども、これはまあ自力といいますけれども、本能的な心の現われ方だと。「係念我国」というのはですね、これは大菩提心を起して、そして成仏というところから、畢意成仏

の道路として、願生往生する。浄土へ往生を願う。それは勝手でありましよう。でもそうはいかんわけでありましよう。だから要するに本能的のものである。それはそうでありましよう。

それから十九の願というものについては、昔の講師でありますところの慧然講師のお説があります。慧然師は、十九願のお念仏は万行随一のお念仏だと。そういうように言われます。けれども、もし万行随一の念仏なら、たとえ南無阿弥陀仏を称えても、南無阿弥陀仏が、無内容の南無阿弥陀仏になってしまう。だから実際はお念仏の本義に背いているのではないかと思う。お念仏の名を与えることができなくなる。

だからその「聞我名号係念我国」という限りは、やはり仏様に帰依しておる。やはり善知識を粗末にしない。善知識からの教えというものはあるに違いない。その善知識の教え。それがすなわち第十七願である。第十七願がなければ、やはり二十の願というものはあり得ないと思えます。そういうことは、今までの真宗学は問題にしていないう。今までの宗学が問題にしておらないで、しかも何の疑いもないというのは、やはり固定してしまっている。

宿善というものは、宿縁を縁とする。第十七願を宿縁という。「遇行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」と。第二十の願を宿縁というのではないと思えます。宿縁というのは、第十七願を宿縁というのである。そうではないかと思う。十八願は宿縁であります。宿縁といえ、諸仏称名の願に違いない。諸仏称名の願は、宿善に対して宿縁であると思えます。十七願から善知識が生れて、そうしてこの善知識の教えを信ずる。善知識の教えを信ずるのは、善知識だけ信ずるではありません。善知識の背景となるのは、すなわち如来の本願でありましよう。そこにこう、時節到来いわゆる時機純熟というものがある。時機純熟して、そして我々が眼まなこを開く。それが第十八願でありましよう。

一一

化身土の巻には二十の願について述べられてあります。ここををずっと読んでいきますという、あの『観

經』流通分のところが引かれている。

仏阿難に語り告げたまはく。汝この法を持って。というよりそれから以下は、正しく弥陀の名号を付属し、過大に流通することを画す。観よりこのかた定散両門の益を説くといえども、仏の本願にのぞめば、衆生をして、一向に専ら弥陀仏の御名を称せしむるなり。(聖全二一六〇頁)

ずつとこう以下、善導大師の釈を「また云はく」「また云はく」と引いておるのですね。この真門のことは、法然上人には教えられておりません。けれども、善導大師にこの真門の教えがあるのでありますからして、それで善導大師のお言葉(『般舟讚』)を引いてありますですね。

また云はく。一切如来方便を設けたまふこと、亦今日の釈迦尊に同じ。機に随ひて法を説くに皆益を蒙る。各各悟解を得て真門に入れ。(聖全二一六一頁)

元照律師の『弥陀経義疏』に云く。如来、持名の功勝れたることを明さんと欲し、先づ余善を貶して少善根と為す。所謂布施・持戒・立寺・造像・礼誦・坐禅・懺念・苦行、一切の福業、若し正信無ければ廻向願求するに、皆少善と為す。往生の因に非ず。若し此の経に依りて名号を執持せば、決定して往生せん。即ち知んぬ、称名は是れ多善根・多福德なりと。昔此の解を作ししに、人尚遲疑せり。近く襄陽の石碑の経本を得て、文理冥符し、始めて深信を懐く。彼に云く。「善男子・善女人、阿弥陀仏を説くを聞きて、一心に乱れず、専ら名号を称せよ。称名を以ての故に、諸罪消滅す。即ち是れ多功德・多善根・多福德の因縁なり」と。(聖全二一六一頁)

この中で「若し正信無ければ」とありますが、「正信」というのは、弘願の如来他力の信心であります。この解を作ししに、人尚遲疑せり」とありますが、昔はこうゆうても、自分の解釈にすぎず、個人の解釈にすぎないというので、自分がそう言いながら、多少心に逡巡しておった、と。ところが「近く襄陽の石碑の経本を得て、文理

冥符し、始めて深信を懐く。元照律師は、近くの襄陽石碑の經文の本文を見て、自分が前から考えておったことが冥符しておると。自ずから暗合したというのでありましようね。そして「始めて深信を懐く」と。自分はまあ深信を懐くことができた。

そうして次に「善男子・善女人、阿弥陀仏を説くを聞きて、一心にして乱れず、専ら名号を称せよ。称名を以ての故に、諸罪消滅す。即ち是れ多功德・多善根・多福德の因縁なり」と。ここには多生曠劫の因縁ということが書いてある。けれどもことに第十七願のことを言っているのではないんでありましよう。だからして祖師聖人は、十七願と二十願の関係をハッキリとは教えてないのであります。けれどもやはりめいめい感じておる。深い感というものがあるに違いないと思います。だからしてまあ諸君がよく考えて、自分の信念を確立していくことは大切だと思うのであります。

法頼機漸ということがあります。法は頼にして機は漸なりということとは、やはりこの十七願と二十の願ということと比較すると分ります。十七願は法でしよ。法は頼なるものでしよ。法は初めから完全円満のものでしよ。ただ機の方が時機純熟しなだけである。そのように機と法が矛盾している。そしてついに方便化土、疑城胎宮といひますか、そういうところに往生する。「七宝の宮殿にむまれては五百歳のとしをへて」。また「疑城胎宮にとどまれば、三宝にはなれたてまつる」と。疑城胎宮に五百歳のあいだとどまって、三宝見聞の利益を得ない。

そしてここに自分自身の機の上の責任がある。罪というのは責任でありましよう。自分の責任である。深く自分の責任を感じるわけでありましよう。信ができ上ってゆくということは、やはり人間ができ上ってゆくことでありましよう。ただ信ができ上るといふのは、抽象的に、信というものを抽象化して、ただ信心ができ上がる、ただ信心があるのではなく、やはり人間ができ上がる。

つまり十七願の法に対してですね、機が自分自身の責任を感じる。ついに自分の心の中に、こう責任を感じて、そ

うして法を光として、自分自身が段々完成していく。自覚が完成していくということがあります。自覚が完成してくると、十七願があるから、十七願に照らされて、そうしてこの自覚が完成してくると、こういうことになると思うのであります。それで化身土巻のところをさらに読んでいきますというのと、『大経』の下巻の文が引かれている。

如来の興世、値ひ難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法・諸波羅蜜、聞くことを得ること亦難し。善知識に遇ひ、法を聞き能く行ずること、此れ亦難しと為す。若し斯の経を聞きて信樂受持すること、難の中之難、此に過ぎて難きは無し。是の故に我が法、是の如く作し、是の如く説き、是の如く教ふ。応当に信順して、法の如く修行すべし、と。(聖全二一六二頁)

「是の如く作し」というのは、釈尊が五濁の世に、五濁の娑婆世界に出世間した。他の仏様はそういうこの娑婆世界を嫌うて、皆なるべくいい世界を選んで、そうして出世された。しかるにこの釈尊はですね、諸仏が皆忌み嫌うておいでになるところの、この五濁の娑婆世界を自らすすんで選ばれた。そういうことは、『阿弥陀経』の終りの流通分のところに記載されております。そして六方恒沙の諸仏は、釈尊を讚嘆しておりますですね。自分たちは、五濁の世界を忌み嫌うて、なるべくいい世界に出て、そうして手柄をしようと思う。しかるに釈迦牟尼仏一人だけは、皆が嫌うておる娑婆世界を選んで、自ら進んで、そうしてこの難事、仏の困難な事業を選んでやられたと。

舍利弗、当に知るべし。我五濁悪世に於て此の難事を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の為に、此の難信の法を説く。是れを甚難と為す。(聖全二一七二頁)

と。そういうことが『阿弥陀経』を読むと書いてある。『阿弥陀経』は、私どもは音読しているのでありますけれども、音読で読んでいるものだからして、まあいいかげんな読み方をしている。経典をよくみて読むと、多少は経典が何を言っているかということを考えますけれども、音読で読むというともう何も考えない。頭が機械的になつてしま

それで、先程の化身士の巻の『大経』下巻の引文に戻りますが、「このゆえに我が法」と。これはつまり仏教について「我が法」としてあるのでありましょう。特に積尊が、諸仏の忌み嫌われた仕事を引き受けておる。「是の如く作し」というのは、つまり全く邪見の人だけがおるが、そういう人を教えるために大変に艱難苦労したということでしょう。身口意の三業に通じて、大変に艱難苦労なされた。諸仏は艱難苦労をせずに、積尊にまかせた。

「是の如く説き」という言葉は、これは、聖道門の方便の教えを説くということでもあります。それから「是の如く教ふ」というのは、これは真実証でありましょう。真実証を教える。他力本願のおみのりを教えた。 「我が法是の如く説き、是の如く教ふ」と。このようなわけである。だからして、この『大無量寿経』を拝読する者は「応当に信順し、如法に修行すべし」と。まさにこれを信順して、教えを信順して、そうしておみりの如く、如法修行する。如法修行・如実修行する。これが流通分の最後のところでございます。

三

この『大経』引文のつぎに、今度は善知識のことが書いてありますね。

『涅槃経』に言はく、経の中に説くが如し。「一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因無量なりと雖も、善知識を説けば則ち己に摂尽しぬ」。我が所説の如し。「一切の悪行は邪見を因と為す。一切悪行の因は無量なりと雖も、若し邪見を説けば則ち己に摂尽しぬ」。或は説かく、「阿耨多羅三藐三菩提は信心を因と為す。是の菩提の因復無量なりと雖も、若し信心を説けば則ち己に摂尽しぬ」と。(聖全三一―一六二頁)

ここで「一切梵行」とありますが、梵とは小乗のことですね。「一切梵行の因は善知識なり」と。一切梵行の因は無量であるが、もう善知識をあげればおさまる。

又言はく、善男子、信に二種有り。一には信、二つには求なり。是の如きの人、復信有りと雖も、推求する能

はず、是の故に名づけて「信不具足」と為す。(聖全二一―一六二頁)

「一つには信、二つには求なり」とは、一つには生信でありましょう。二つには願求でありましょう。「求」は求める。願い求めるということでありましょう。だから信だけではなく、信の上に更に推求することが必要である。信と求とがともに必要である。信あって求めなければ「信不具足」である。

信に復二種あり、一には聞従り生ず、二には思従り生ず。是の人の信心は、聞従りして生じ、思従り生ぜず、是故に名けて信不具足とする。また二種あり、一には道ありと信ず、二つには得者を信ず。是人の信心は唯道有ることを信じて、都て得道之人有ることを信ぜず、是を名けて「信不具足」と為す。復二種有り、一には信正、二には信邪なり。「因果有り仏・法・僧有り」と言はん、是を「信正」と名く。「因果無く三宝性異なり」と言ひて、諸の邪語富蘭那等を信ずる、是を「信邪」と名く。是の人仏・法・僧宝を信ずと雖も、三宝の同一性相を信ぜず、因果を信ずと雖も、得者を信ぜず。是の故に名けて「信不具足」と為す。是の人不具足の信を成就す。

(聖全二一―一六二頁)

これと同じようなことが信の巻の末巻の初めのところに、「聞其名号信心歓喜」の本願成就の文を釈するときに、『涅槃經』から引用してある。それと照らし合せて、今の文を読んで了解したらよいかと思うんであります。

とにかく、この、善知識のことが書いてありますね。そして極難信ということを教えるわけであります。この二十願というものと、それから第十七願と相照らして、この極難信ということを教えて下さる。極難信をのりこえて、そうして真実の信心を得る。これは言うてみれば、「遠く宿縁を慶べ」ということである。善知識に遇うた宿縁を慶ぶべきものであるということが書いてあります。

まあずっと『涅槃經』の文が引いてあって、それから更に読んでいくと「光明寺の和尚の云はく」とあります。これは『般舟讚』の文であるかと思えます。

弥陀の弘誓の力を蒙らずば、何の時何の劫にか娑婆を出でん。何してか今日宝國に到ることを期せん。實に是れ娑婆本師の力なり。若し本師知識の勤めに非ずば、弥陀の浄土如何が入らん。浄土に生ずることを得て慈恩を報ぜよ。(聖全二一六五頁)

娑婆本師とは釈迦如来のことでありましょう。まあいろいろこう書いてあって、それから次に自信教人信の言葉が出てますね。これは『往生礼讚』の言葉です。

又云く、仏世甚だ値ひ難し、人信慧有ること難し、遇希有の法を聞くこと、此れ復最も難しと為す。自らも信じ人を教へて信ぜしむること難の中に転た更難し。大悲弘く智昇法師の懺儀の文なり、普く化するは、真に仏恩を報ずるに成る、と。(聖全二一六五頁)

やはりこの中にも、自分が真実の信心を得るということは容易ならんことである、と書かれている。と書かれている。自分が真実の信心に眼を開くということは、多少曠劫の因縁というのがあって、はじめて信ずることができる。だからやはり、自分が信を得たならば、やはり仏恩を報ずるために、他の衆生にも自分の喜びを分けてやる。分けてやらねばならぬ。こういうのが教人信ということでありましょう。ところが自ら信じるということは、容易ではない。教人信もまた容易ではない。自信が容易でないから、また教人信も容易でない。教人信なんていうことは、なかなか一朝一夕に出来るものではない。そういうことを言うているんであります。だから「自らも信じ人を教へて信ぜしむること難の中に転た更難し」と。そう書いてありますね。

教人信が難しいということは、自ら信ずることが難しいから、教人信が難しい。けれども自ら信ずることが難しいものであるならば、どのような艱難をも克服して、そして教人信につとめなきゃならん。そのためには自分の身を犠牲にしても、つとめなきゃならん。そういうのであります。 「難の中に転た更難し」と。「転」という字は、方向転換などという場合の転ずるといふ、「転」という字を書いて「転」と読むのであります。「大悲広く普く化する」

とは、大悲が広く普く一切の人を教化する。一切の人を教化するという難事を行ずることは、これ「真に仏恩を報ずるに成る」。

まあこれで見るといって、その「仏恩を報ずる」ということはですね、自信も教人信も仏恩報謝であります。他人を教化することだけが、教人信だけが仏恩報謝でなくて、自ら信ずるといことが仏恩報謝である。信心すなわち報恩である。信心することが報恩である。もっとも大きな報恩である。

まあここでは、善導大師の言葉を沢山引いてありますが、それは法然上人の教えというものがあって、それでこの善導大師のお言葉が引かれる。法然上人が善導大師に立っておいでになりますから、やはり祖師上人は、法然上人の教えによってこう善導大師のお言葉を大変に、まあねんごろに、お読みしたわけでありましょう。で、それを承けて、真門を結釈して、

真に知んぬ。専修にして而して雑心なるものは大慶喜心を獲ず。故に宗師は……(聖全二一六五頁)

と。専修専心というものと専修雑心というものとがあります。その専修専心ということは容易にできないのでありまして、専修であっても専修は形だけでありましょう。形は専修であっても、専心になれない。専修雑心である。「真に知んぬ。専修にして而して雑心なるものは」と。専修にして専心なるものは、これは真実の信心でありましょう。専修にして雑心なるものは、やはり二十願のところにとどまっているのでありましょう。

つぎに「専修にして而して雑心なるものは、大慶喜心を獲ず。故に宗師は」と、こうありますが、宗師というのは善導大師でありましょう。善導大師は雑修十三の失というものを述べておられます。『往生礼讚』であります。この雑修十三の失というものについてはですね、諸君も聞いておられるだろうと思います。雑修十三の失の中において、初めの九つの失と終りの四つの失とがある。失はまあ過よでありましょう。これを親鸞聖人はよくお読みになりまして、これを読み分けていなさる。

初めの九つの失はですね、これはつまり専修雑心の人でも、ずっとそれを捨てることができる。ところがあとの四つの失はですね、捨てることができない。専修雑心であっても、初めの九つの失は乗り越えることはできるけれども、あとの四つの失は専修雑心の人は乗り越えることができない。祖師聖人は初めの九つとあとの四つをよく読んで、そして分けてお読みになっておられる。このことが『教行信証』のここに記されているのである。これは、雑修十三の失、失の十三の性質をよくお読みになったのだと思います。そしてここに四つの失が挙げられているのですが、第十・十一・十二・十三がそうです。

故に宗師は、「彼の仏恩を念報すること無し、業行を作すと雖も心に輕慢を生じ、常に名利と相應するが故に。人我自ら覆ふて同行・善知識に親近せざるが故に。窺みて雑縁に近きて、往生の正行を自障・障他するが故に」と云へり。(聖全二一六五頁)

「故に」が三つしかないのですけれども、「彼の仏恩を念報すること無し、業行を作すと雖も心に輕慢を生じ」というところに「故に」が一つ抜けているのであります。四つの失を挙げてあるのでございます。そして次に、

悲しき哉垢障の凡愚、無際より已来、助正間雜し、定散心雜はるが故に、出離その期無し。自ら流轉輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰し巨く、大信海に入り巨し。良に傷嗟す可し、深く悲嘆す可し。

(聖全二一六五頁)

「助正間雜」とは、五正行のなかの助業と正業とが区別がよく分らない。助正を間雜すると。それから定心・散心が雜わる。それを「専修にして而して雑心なり」というのであります。定心・散心が雜わるというのは、定散自力の心でありましょう。定散の自力の心が雜わる故に、「出離その期無し」と。そして更に、

凡そ大小聖人・一切善人、本願の嘉号を以て己が善根と為るが故に、信を生ずること能はず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はず。故に報に入ること無し。(聖全二一六五頁)

「大小聖人」というのは、大乘や小乗の聖人。大乘の聖人は菩薩でありましょう。小乗の聖人は、声聞・阿羅漢でありましょう。「一切善人」というのは、凡夫でありましょう。「一切善人」は、凡夫の中の善人。定散自力の善人でありましょう。この人たちは、「本願の嘉号を以て己が善根と為る」。本願の嘉号を自力の善根とする。故に「信を生ずること能ず、仏智を了らず」。仏智を疑う。「彼の因を建立せることを了知する能はず」。「彼の因」とは、衆生を助け給うところの因である。つまり衆生往生の因。これを了知することができない。それ故に疑城胎宮にとどまって、そうして真実の報土へ入ることができない。

四

それからこの次に三願の転入がでております。三願転入の前に厳しいお言葉があつて、それから三願転入というものがでておるんであります。三願転入のところでは、十八・十九・二十の願がでております。ところが十九の願と二十の願というのは、何かこう順序が転倒しているように見えますですね。ここでは、十九の願から二十の願を徑て、そうして十八の願に帰入していく。そういう風になっております。

十九の願と二十の願と順序が転倒しているように思われるが、これはどういう風に転倒しているのか。そのことは一向真宗学では問題にしておらない。三願転入ということになれば、まず聖道門から浄土門に入ってくる。まずもつて十九の願である。そして十九の願から二十の願でもつて、大変な修行をしておる。二十の願でもつて、大変な苦勞をしなくてはならない。

この苦勞はちょっと無駄なようでありませうけれども、やはりここでもって信心が問題になる。人から聞き覚えた信心でなくて、本当の自覚の信が問題になる。自覚の信ということになると、なかなか信心が容易に成熟していかんわけでありませう。この苦勞は、しかし、無駄ではないんでありませう。やはりこう罪業を懺悔するということが

必要なのであります。懺悔を行じ、そして信心をうる。自分が眞実信心を得ないということは、まあこれは自分の責任である。責任は仏様の上にあるのではなしに、一重に自分の責任である。自分が責任があるということは、仏様は御照覽し、ちゃんと知っていなざる。

ただ二十の願というものは、また十七願がある。だから二十の願と十七の願というものは、ずっとこう、私が生れない前からある。宿世といえますか、宿世より十七願と二十の願という二つの願があって、そうして私どもは教えを受けなくても、生れながらに阿弥陀仏の本願の御恩に預かっているのであります。こういうことを教えていなざるわけですね。で、十七願と十八願については、

十七・十八更に相離れず、行信・能所・機法一也。(聖全二―二九頁)

と、『六要鈔』にはまあそれだけのことを言うておる。けれども、この十七願と二十の願というのは、法は宿縁となり、機の方は宿善というものになる。そしてこの機の方は、「聞我名号係念我国」という。そういう罪福の信というものをもとにして、そうして仏法が私どもに与えられているのだと思います。

そういうようなことを諸君が一人で考えないならば、諸君のめいめいが語り合せて、そうしてこう、専修について知ることが必要でないかと、そう思うのであります。それはまあ諸君が眞宗学の学問をしていく場合に、ひとつの大切な問題であろうと思います。

で、この十九願成就の文。『教行信証』では、

此の願成就の文は、即ち三輩の文是れなり、『観経』の定散九品の文是れなり。(聖全三―一四四頁)

と化身土巻の最初のところで十九願成就の文をハッキリと教えてあります。法然上人は、十九願とか二十の願ということは教えておられない。ただ「三輩念仏往生之文」(『選択集』三輩章)と、「三輩念仏往生之文」という見出しをもって教えられる。だから念仏往生の三輩に廃立というものがある。廃立だけじゃなしに、助正・傍正という、そう

いうものの見方もある。そういう見方もあるけれども、やはり廢立としてこう見ていくのである。そうすると十九の願というものはですね、やはり二十の願を前提にして、一応こう開かれている、と。二十の願を前提としなければ、十九の願だけのものである。やはり聖道門から淨土門に帰入したということは、二十の願というものがあって、また十七願というものがある。

それであるがゆえに聖道門を捨てて淨土門に帰したのである。淨土門に帰したけれども、本当に、阿弥陀仏の本願の本当の思召しというものが分らない。御開山聖人は、法然上人にお会いになって、他力本願の趣旨を會得なされた。他力本願を師授され、會得なされたのでありましようけれども、しかしそれからなかなか順調にいかない。何かこう信心をぶち毀すものがでてくる。つまり逆縁でもってこう親鸞聖人を試すというのか、その逆縁というものが親鸞聖人を試していくということがある。そういう様々な難問題にぶつかつた。ぶつかつていっても、とにかくそれを通過していくことができた。通過していったのは、やはり法然上人の教えというものがあつたと。法然上人にお会いしたときに、雜行を捨てて本願に帰した。

こういうことがあるわけです。けれども、困難に遇うて信心が練り上げられていった。上の信心が洗練されてきた。法然上人にお会いになったときに、上の信心を決定されたということは、これは否定するわけにはいかんと思うのであります。だけれども様々の逆境に遇うても、その信心がぐらつかない。信心がぐらつかないのであります。けれども随分艱難苦勞をされて、そうして信心の力を段々に証明されてきた。証明されてきたということは、やはり信心が明白になってきた。

さようなことがある。つまり化身土の巻に、

良に勤め、既に恒沙の勧めなれば、信も亦恒沙の信なり。(聖全二一一五七頁)

というような言葉があります。『阿弥陀經』には六方恒沙の諸仏が証誠護念されると、諸仏の勧めというものが語ら

れたと。諸仏の勧めというものは、やはり法然上人に遇うたから、諸仏の勧めということが事実になってくる。法然上人に遇わないならば、ただ經文に書いてあるだけでありまして、事実が分りません。法然上人に遇うて、やはり法然上人は、十方恒沙の諸仏のおひとりであり、また諸仏全体を代表しておいになるということが分る。「一仏すなわち一切仏」。一人一人の仏様が、みな一切の仏様を代表している。代表しておいになるから、法然上人の上に十方恒沙の諸仏がみなあらわれている。諸仏の教えが法然上人の教えのなかに代表されて、法然上人の教えの内容となつてゐる。そういうことから「勧め恒沙の勧めなれば信も亦恒沙の信なり」というような言葉をもって表現しておいでになるのだと思います。

私は非常に頭が悪いからして言葉も明瞭に表現することができません。諸君はしっかりしておいになりませんから、大いに研究もし、また思索もして、そしてこの信を磨きあげていって頂きたい。こういうことが大切なことだと思います。

(本稿は昭和四十四年十二月十一日大谷大学大学院における講義の筆録である。文責 安富)